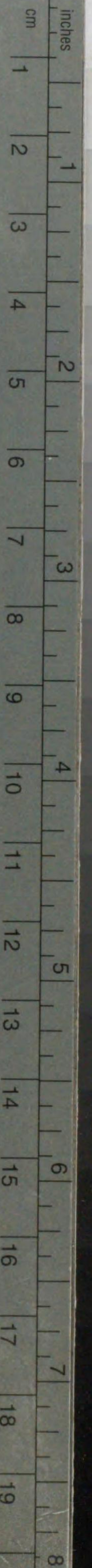


Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

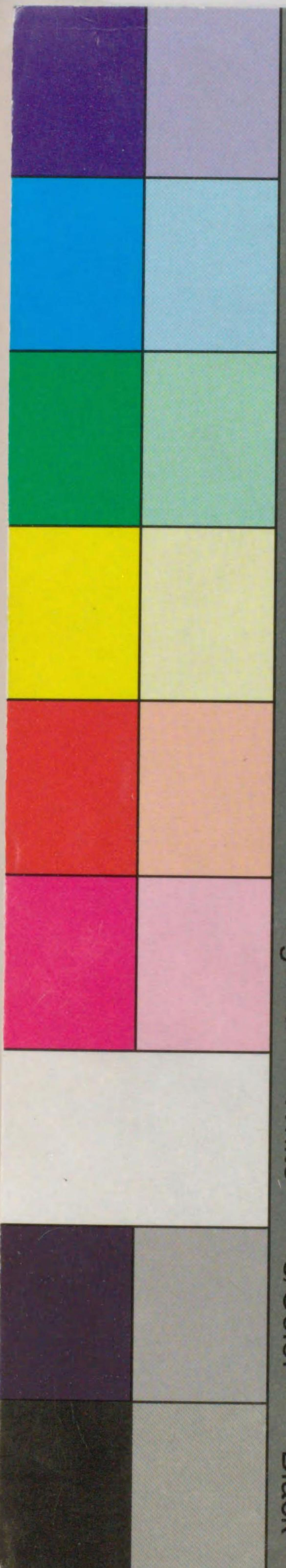
Magenta

White

3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



御消息集

足利宣正

御消息集

足利宣正

目次

第一章 關東教團の動搖	三
第二章 御消息編集寫傳の事情	七
第三章 御消息集の特異性	一四
第四章 一念多念有念無念の異計	一八
第五章 念佛停止事件	三三
第六章 造惡無礙の邪義	三六
第七章 慈信房の祕事法門	三三
第八章 十二光佛義	四〇
第九章 如來二種の廻向	四四
第十章 讚仰の數々	四九

第一章 關東教團の動搖

我が親鸞聖人の御一生に於いて關東教化の二十年は本當に宗教家としての活動をなされた時である。それだけ念佛の法門も興隆し時ならぬ法雨に隨喜したものであるが、後日の憂患も又その間に培はれたやうである。聖人は常陸、下野、下總を主として教化なさつたものであるが「道俗跡を尋ね貴賤ちまたに溢る」で此の間に尠からぬ弟子門徒が出来たのである。然るに如何なる譯あつてか貞永元年頃聖人は室惠信尼と數ある子女を残して住み慣れし關東を引き拂ふて京都に向はれたのである。道中、相模、三河、近江などの勸化に兩三年を費されて嘉禎元年頃京都にお歸りになつた。室惠信尼も又二三の子女を連れて家郷越後の國府に歸られて佗住居をなさつたやうである。關東には長男の慈信房善鸞を初め眞佛、性信、顯智、順信、顯智など云ふ多數の弟子が居残り總べてそれぞれ有縁の地に居住して自行化他に從事して居つた。然るに關東と云ふ土地は非常に物質的であり現世主義のところであつて動もすると其の弊に陥る事が多い。是れがため辨圓も曾ては聖人を誣ふたと云ふ程に修驗道も盛んであり、享樂主義の陰陽道も流行したものである。搗て、加へて眞言立川流の邪義が浸染して來て尠からず害毒を流して居つたやうである。それで聖人の嫡男として居残つて居る慈信房にしても、また高弟として眞佛、性信、

顯智、順信、專信等は警戒もし、教團の統一節制に就ては特に責任の地位にあつたのである。然るに慈信房は如何なる了簡違ひにや豫ねて父聖人に代はり第二の親鸞として關東の教團に君臨しやうと云ふ野心が焰へて居つた。かかる事は固より聖人の認めらるゝものでもなく、又眞佛、性信と云ふ長老を擱いて出来る譯のものでもない。そこで慈信房は已むなく是等の長老を讒訴して父聖人と門弟子との間を割き、又祕事法門唯授一人の妄説を吐いて弟子と門徒との中を割いたのである。然るに是れと前後して既に教團の内部には宗意安心の誤解曲解が續出し、一念多念、有念無念の争ひが起り、神明を輕んじたり、惡無礙の思想に溺れたりして教團は收拾すべからざる混亂に陥つたのである。慈信房は又得たり賢しと是れを利用して教團の巨頭を陥れやうと惡宣傳に努め、ために鎌倉幕府や六波羅探題の目が光ると云ふ官憲の制裁になつて來たのである。

のみならず日蓮上人が出て新佛敎を唱導し建長五年四月まづ安房の清澄山に於いて念佛無間の四個格言を提唱し、更に鎌倉に來つて守護國家論、立正安國論等を書き或は消息を飛ばして念佛無間を叫んだのである。さなきだに念佛者は惡無礙に墮し神明を輕賤して國家の安寧秩序を破壊するなど云ふ惡宣傳の盛んな時であるから、日蓮の此の念佛無間は大なる恐怖を來したものである。それ丈け反逆者は盛んに煽動もしたやうである。

京都の聖人は僅かに舍弟の尋有、兼有、從兄弟の尊蓮、宗綱等とそれに常隨の蓮位をたのみにして、只管報佛恩に精進せらるゝの餘り、聖敎の御撰述に餘念もなかつたのであるが、思ひがけなくも關東教團の動亂を耳にせ

られたのである。飛脚が來る、上書が飛ぶ、態々上洛するものもあると云ふ鹽梅に聖人の身邊は非常に多忙を告げて來たのである。

末燈鈔、御消息集、血脈文集等に載つて居る御消息は斯る動亂の裡になつたものである。それで御消息の内容の多くは異計邪義に對する排擊是正になつて居る譯である。殊に御消息集收むる所の十一通の如きは信仰界の動亂の中でも惡質に對するものゝ御消息が多いやうである。流石に親子の情義と云ふものか聖人も初めは慈信房の讒誣を信ぜられて、眞佛、性信、入信房などを反逆者として深く悲まれ長太息せられたやうである。祕事法門に就ても是れ又無智の信者はさもあらうと妄信したものか大舉して慈信房に走つたものもあつたやうである。何分遠隔の事であるから聖人も初めは事情も分らず一時は大分慈信房に欺されて居られたやうであるが、其後關東より態々上京して來るものもあれば又弟子の上書等もあつたので漸く事態が分明になり斷乎たる所置に出られたのである。御消息集十一通は此の事情に依つて大概要領が得らるゝやうである。獨り念佛無間の影響は殆んど認められぬやうであるが、是れは却つて御消息集以外淨土和讀の現世利益讚若くは正像末和讀の「念佛誹謗の輩は阿鼻地獄に墮在して八萬劫中大苦惱ひまなく受くとぞ説き給ふ」とある御言葉などに依つて窺はるゝやうにおもう。さて是等の御消息に就いて、當時關東教團を動搖せしめた異計邪義を稽ふるに先づ善知識だのみのあつた事は高田顯智書寫にかゝる慈信房宛ての御消息を初め御消息集第六通と第八通並に血脈文集第二通に依つて分るので

ある。また一念多念有念無念の異義のあつたことは末燈鈔第一通、御消息集第一通第三通に依つて知ることが出来る。正定聚を如來と等しと云ふ異計は末燈鈔第十四通に依つて知られ、また惡無礙の邪義のあつた事は末燈鈔第十六通第十九通及び御消息集第四通第五通に依つて知る事が出来る。また學問と往生とに關する謬見のあつたことは末燈鈔第六通に見え、また彌陀一佛を信する結果諸佛神明を輕賤する傾向のあつた事は御消息集第四通などに依つて知る事が出来るのである。特に此の神明輕賤の傾向と惡無礙の邪義は獨り宗意安心に抵觸するばかりでなく、國家の風教秩序を害する問題として世の物議にも上つたやうであり、吾妻鏡百練鈔などにも是れに關する記事が見へて居るやうである。此の關東教團の動亂と云ふものを豫備知識として特に御消息集を研究すると、理解にも便であり、興味もあると云ふものである。

第二章 御消息編集寫傳の事情

親鸞聖人の御消息として集成せられて居るものに末燈鈔、御消息集、血脈文集などがある。此の外に高田專修寺には直弟善性の編んだ御消息集と云ふがあり、高田御書にも纏められてある。又佛先寺などにもそれ／＼傳へられて居るやうである。然かし聖人の御消息としては此の集成せられたものゝみでなく、弟子の私かに書寫したのものもあり、又本願寺や專修寺には家庭關係や法門關係に依つて集成書寫に漏れた聖人の御眞蹟の傳はつて居るものもある。無論重複して居るものもあるから取捨合計すると現に四十通ほど傳へられて居るやうである。是等の御消息は何れも聖人の御歸洛後、關東の門弟子との間に取り交はされたもので、現に善性の御消息集には門弟慶信、淨信、專信の上書までも編入せられて居り、末燈鈔にも慶信の上書一通が載せられて居るので、一部分にしても便利な點があるやうである。

末燈鈔は聖人弘長二年十一月廿八日御往生後七十一年を距てる正慶二年四月本願寺覺如の次男從覺の編集したもので、二十通あるが其の中第十四通は今申した弟子慶信の上書であるから是れを除外して十九通となる譯である。御消息集は覺如の編集と傳へられて居るけれども事實は疑はしいやうである。初め十九通收められて居つた

やうであるけれども、末燈鈔と重複せられて居るものを除き現に十一通本として行はれて居る。血脈文集は編者不詳となつて居るも内容から稽へて見ると門弟性信か若くはその系統にあるものゝ編集になつたものだらうとおもう。

書寫の方は主として高田専修寺に傳へられて居るものであつて、聖人の直弟で下野高田の顯智が、御往生後四十二年を距てる嘉元三年七月廿七日に慈信房善鸞宛の一通を書寫して居る。顯智の後を繼いで高田門徒を統率した専空が、正和元年十二月十三日性信淨信宛の二通を書寫して居り、また専修寺第十世眞惠の弟子眞智が永正十七年七月廿八日眞佛、淨信、教養宛の三通を書寫して居るが、是等は顯智寫傳のものゝ外皆末燈鈔に編入せられて居るものである。尙ほ専修寺には下總路田の善性が編集した御消息集が傳へられて居るが、是れも専信宛の御消息一通の外、末燈鈔に悉く編集せられて居るものばかりである。たゞ此の善性の御消息集には、前申す通り慶信、淨信、専信など云ふ門弟の上書や、蓮位より慶信に贈つた書狀が載つてゐるので研究上有益のものとなつて居る。

眞蹟の方は從來世に知られなないのであるが本願寺に三通、東本願寺に一通、専修寺に六通あるが、東本願寺の一通と専修寺の内三通とは末燈鈔に出て居るので、本願寺の三通と専修寺の残る眞佛、高田入道、覺信尼宛の三通は集成寫傳に漏れて居るものである。本願寺は聖人の血族系を代表し、専修寺は聖人の門弟系を代表して

居る型になつて居るので、その傳來の眞蹟御消息も内容が自づからそんな關係になつて居るやうである。

然かし聖人の御消息は是れで總べてを盡して居ると云ふ譯ではない。寶曆年間越後の順崇と云ふ人に依つて血脈文集が初めて上梓せられた砌り、その跋文に御尺牘すべて九十三通ありと云つて居る。現に最近の發見として専修寺に傳ふる覺信尼宛の一通、並に越後與板の蓮宗寺に傳ふる常念宛の御消息の如きは或は其の一部分であるかも知れぬ。従つて今後何時何處から發見せられぬとも限らないのである。

尙ほ此では一概に御消息と申して居るが嚴密に云へば末燈鈔や御消息集の中には別に教語體のものもあり、また註釋體のものもあつて、聖人が請はるゝまゝに書き與へられた別種のものであることを注意して置きたいとおもう。

さて是等數ある御消息が如何なる事情で末燈鈔とか御消息集とか云ふものに集成せられたのであらうか、また顯智がどう云ふ理由で特に成る一部分を寫傳したものであらうか、その事情を研究して見たいのである。申す迄もなく聖人の關東教化に於いて常陸、下野、下總地方に鈔からぬ門弟子が出來、その門弟子の散在する地方々々に小門徒が發生した結果、「親鸞は弟子一人も有たず候」とは仰有つたものゝ自然の順序として聖人、弟子、門徒と云ふ分子が出來て、此に自づと教團と云ふものが結制せらるゝやうになつた。聖人が御歸洛後異計邪義の續出に依つて、一時は意外の動搖もあつたが雨降つて地固まるで、關東の教團は概して統制が保たれて居つたやう

である。

然るに弘長二年十一月廿八日聖人が大往生を遂げられて以来、教團は中心を失つて仕舞つたのである。今までは遠方とは云へ京都には殿とした聖人が居られたのである。「尙ほ覺束なき事あらば今日まで生きて候へば態とも此方へ訪ね給ふべし、また便にも仰せ給ふべし」とも申されて居らるゝから憑みにもなり力強いものであつた然るに御往生になつて見ると全く中心を失つて仕舞つて誰れを憑みにし力にするやうもない。

御葬送は折りから聖人の許に來合はせて居つた高田の顯智や鶴見の專信等に依て執り行はれ、御廟所も出來て御遺族として門弟子達に親しみもあると云ふ所で差し當り彌女即ち覺信尼を留守職るすしよに煩はす事となつたのである。「門葉國郡に充滿し末流處々に遍布して幾千萬と云ふ事を知らず、その稟教を重んじて彼の報謝を抽んづる輩、縋素老少面々に歩みを運んで年々廟堂に詣す」とある通り關東の弟子達は遙々歩みを運んで參詣を續けて居つたものである。廟堂の參詣はそれでよいが關東の教團はそれ以來中心を失つて銘々割據と云ふ事になり、小門徒が續出するばかりで其の間に連絡も統一もないやうになつて仕舞つた。そうなると教團の統一と云ふことが出來なくなり、自分の門流を有利に置こうと云ふ事になつて此に自然と排他自立の傾向を生む事になつたのである。即ち顯智は下野高田に依つて高田門徒を樹立しやうとするし、性信は下總横會根に居つて横會根門徒を強化しやうとするし、順信は常陸鹿島に依つて鹿島門徒を建設し、善性は常陸菟田に依り、專信は遠江鶴見に依り、信願は

下野那須に依りてそれゝ自家の門徒を樹立し、他門徒を排撃してまでも自門徒の發展を期せやうとしたのである。

聖人の御往生前後に當つて門弟達はどんな風に散在して居つたか、それが即ち後日の割據となつて門徒樹立の前提となつたものである。是れに就いて幸ひ現に親鸞聖人門弟交名牒と云ふものが傳へられて居る。多分團體取締法か何かのために當時幕府の指令に對して、關東の教團の方から幕府に注進してあつたものであらう。此の交名牒には常陸の光明寺、甲斐の萬福寺、三河の妙源寺、近江の光照寺、等に傳へられて居る異本があるが、就中、妙源寺本が最も古く康永三年十月即ち聖人滅後八十二年の書寫であるから比較的信用も出來るやうである。これには初め直弟四十四人を連ね次に眞佛の門下十八名を擧げ以下法孫を圖示して居る。四十四名の内三十六名は常陸、下野、下總、奥州、武藏、越後、等東國散在の弟子であり、残る八名は洛中居住の弟子である。即ち左の通りである。

東國散在の弟子	
常陸	入西、乘然、順信、慶西、善性、實念、入信、念信、乘信、唯信、 慈善、善明、安養、唯圓、善念、賴重、法善、明法、證信
十九人	
下野	眞佛、覺信、慶信、信願、尼法佛
五人	

下總	性信、信樂、常念	三人
奥州	如信、無爲子、是信、本願、唯信、唯佛	六人
武藏	西念	一人
越後	覺善	一人
不詳	西願	一人
洛中居住の弟子		
京都	尊蓮、宗綱、尋有、兼有、蓮位、賢阿、善々、淨信	八人

然し以上で聖人の弟子が盡きて居るのではない。此に現はれて居らぬもので御消息の宛名になり又その中に出て居る弟子も尠くないのである。即ち左の十五名あるやうである。

教名、有阿、善證、信見、信願、護念、慈信、法信、正念、平塚入道、遠江尼御前、久下殿、源藤四郎中
太郎入道、しむじ入道

この中信見、善證(乘)、慈信、信願の四名は背師自立の故を以て教團を破門せられて居る人であるから残り十一名となる。

さて斯やうに各地割據の門徒が自家の勢力を張り有利に發展しやうとするには、先づ第一に教權の擁立を圖ら

ねばならぬ。即ち自分が宗祖聖人の法脈を相承して居る正統者である。それには斯う云ふ證權を有つて居ると云ふ事を立證せねばならぬ。然るに教行信證初め聖人には數多い著作もあるが未だ流布普及の道もなく従つて容易に入手出来るものでもない。のみならずそう云ふものは個人的性質を有つて居るものではないから勝手に自家の教權擁立に利用せらるゝものでもない。そこへ行くと御消息は概して個人關係のものであるから是れを利用するに大變都合がよいのである。此の理由の下に各地に割據して居る門徒間に競ふて書寫せられたり、編集せられたりしたものである。一番早く集成せられた下總露田の善性のもは今まで政略的意味は見へないけれども、顯智書寫の慈信房義絶の御消息などは當時大谷に於ける唯善騒動を控へて居る場合であり、血族系擡頭の將來を見越し、門弟系として隆々なる勢力を養ひ居る高田門徒のために備へたものである。末燈鈔にしても御消息集にしても又血脈文集にしても此の意味に於いて内容を研究したが最も要領を得易いのである。末燈鈔の内題たる本願寺親鸞大師の御已證並に邊州處々の御消息等類聚鈔と云ふ名も、また血脈文集と云ふ名も自づから語るに落つて居るやうである。御消息の書寫集成は總べて此の意味で御承知を願ひたいのである。

第三章 御消息集の特異性

一四

御消息の編集寫傳は前申す通り、各自門徒が教權を擁立するために利用したものである。此の意味に於いて御消息集を考察するに、本集所收十一通の中、慈信房善鸞宛て最も多くして三通、性信房宛てが是れに次ぎて二通、教忍、眞淨、唯信、慶西、念佛の人々へと、宛名不明のものが各一通づゝである。此の慈信房宛てと性信房宛てが比較的多いと云ふことは、御消息集の特色として考慮せねばならぬ點である。そこで慈信房、性信房宛ての御消息がどう云ふ用件になつて居るか云ふに、慈信房に對しては善知識たのみ邪義、延いては造惡無礙の僻見を排撃せられたものである。性信房に對しては念佛停止てんしの事件を縁として其の勞を犒ひ、益々念佛を勧められ居らるゝ。また鎌倉幕府へ訴訟までせられたに就ては、念佛に對する謬見者、謗難者に對し愈々佛恩を思ひ、念佛に徹底せねばならぬと云ふ事を誨へられたのである。是れで見ると慈信房に對しては何處までも誠飭して居らるゝのであつて血族系には不利である。それだけ性信房など門弟系には有利に置かれてあるものと考へねばならぬ。従つて一説のやうに本集を以つて覺如上人の編集であるなどゝは、どうしても信ぜられぬやうになる。矢張是れは下總横會根門徒の性信系に有利なもので、血族系の頭目慈信房に對立して居つた性信系統のものに依つ

て編集せられたものであらうとおもう。若し覺如上人その他血族系に依つて編集せられたものならば、如何に異義邪説を主張せられたものとは云へ、好んで慈信房排撃の文書を編集する理由は有り得ないとおもう。此に本集獨得の特色があるので、即ち性信房は聖人門弟の長老として鎌倉幕府の念佛停止事件に就ての功勞者であり、聖人の信望を一身に集めて居つたものであることを物語つて居るのである。それで是れに關係する破邪顯正の宗意安心を傍證するために、教忍、眞淨、唯信、慶西、念佛の人々宛ての御消息を編集したものと推定せらるる理由が充分あるとおもう。

尤も慈信房に對しては戒飭位の程度で、血脈文集に載つて居る性信房宛て善鸞義絶の御消息や、また高田の顯智書寫として、專修寺に傳へられて居る慈信房宛て父子義絶の御消息のやうに勘當せられた極端のものではないが、それでも其の道程にある性質のものであるから慈信房には不利であることだけは間違ひない。是れに反して性信に對しては彼れが念佛禁制に關して當時中央政府の所在地鎌倉に在つて斡旋大に努めて居る。尠くとも性信が罪を一身に背負ふて立つて居るやうに見える。「御文のやうおほかたの陳狀よく御はからひども候ひけりうれしく候」と仰有つて居らるるから、性信が能く善處した功績を認めて居らるゝ。些々たる一人事ではあるが是れに依つて本集の特殊的地位が考察せらるゝやうである。

つぎに今一つ御消息集の特色として見らるゝのは大部分が異義邪執に關するものであり、特に惡質に關するも

のが多いと云ふことである。此の點は末燈鈔などゝ比較して大に特色を帯びて居るところである。末燈鈔にも第六通に學匠沙汰があり、第九通に誓願名號別執計があり、第十一章に行信一念の沙汰があり、第十五通第十八通に正定滅度の釋が出て居るけれども概して學解^{がくげ}上の問題であつて、邪義邪執のものとしては僅かに第十六通と第十九通ばかりである。是れを見ると御消息集は末燈鈔を逆に行つたやうに惡質のものが多い。第一通第三通の一念多念有念無念の異計にしても、第二通第九通の念佛訴訟事件にしても、第四通第五通の造惡無礙の邪義にしても、又第六、七、八通の慈信房の祕事法門にしても、單に宗意安心と云ふ意味でなく、一宗の存立を脅かし、國家の安寧秩序を破壊すると云ふ恐るべき危險性のものである。無事のものとしては僅かに第十第十一の二通に過ぎぬ。こんな鹽梅に主として危險思想に關するものばかり編集せられて居ると云ふことが本集の特色と云はねばならぬ。是れは何か編集者に思惑があつたものであらうとおもふ。是れだけでも編集者の何人であつたかを推定して見たいと思ふのであるが其處まで到達し得ないのは遺憾である。以上の二項を本集の特異性として考慮し何かの手掛りを得たいものとおもふ。

さて本集十一通に就いて各通を點檢して見るに數は十一通であるが、事項は六個に纏めらるゝやうである。宛名不詳の第一通と教忍宛の第三通とは一念多念有念無念の異義であり、性信宛の第二通と第九通とは念佛禁制の事件である。念佛の人々宛の第四通と慈信房宛の第五通は造惡無礙の邪義である。それから又慈信房宛の

第六通と第七通、眞淨宛の第八通と此の三通は慈信房善鸞の異義に關係したものである。尤も慈信房の異義の如何なるものであつたかに就ては或は本願ほこりの邪義であつたと云ひ、或は善知識だのみの異計であつたとも云ひ、或は又造惡無礙の一種であつたとも傳へられて居る。何れにしても別箇のものではなく其の間には共通した思想が流れて居つたやうである。それから後は第十通が十二光佛の釋義であり、第十一通が往還廻向義の解説であつて總べて六項目に分類せらるゝやうである。

以下此の各項目に就いて簡單に概説して見る。

第四章 一念多念有念無念の異計

御消息集の第一通と第三通とに依り傍ら末燈鈔の第十一通を参考して、一念多念有念無念の異計を述べて見やうとおもう。第一通は二月三日附きで第三通は十二月廿六日附きであるが共に年時が不明で、推定の手掛りもない譯である。併し此の邪義は法然上人時代既に存在し又聖人の一生を通じて流行し、年時も長く流布の範圍も廣かつたやうである。第一通は宛名がなく第三通は教忍宛てになつて居る。教忍と云ふは聖人の直弟になく下野高田の顯智附弟になつて居るが其の教忍であるかどうか疑問である。此の御消息には「常陸國中の念佛者の中に有念無念の念佛沙汰の聞へ候ふは僻事に候」とあり、又鹿島、行方と云ふ常陸の地名が出て居る所を見ると主として常陸の弟子門徒に宛てられたやうにおもう。

此の邪義は前に申した通り法然上人の時代からあつたもので是れに對する上人の教諭が隨所に見出され、引き續いて我が聖人の時代に及んで居る。末燈鈔に建長四年某月附き御消息に「京にも心得ずして様々に迷ひあふて候めり、國々にも多く聞へ候、法然聖人の御弟子の中にも我れは由々しき學生などと思ひあひたる人々も此の世には皆な様々に法文を云ひ違へて身にも迷ひ人を迷はして傾ひあふて候ふあり」とあり、又今集第一通に「京にも一念多念など申す争ひ事の多く候ふやうにあること更々候ふべからず乃至鹿島、行方そのならびの人々にも此の意をよく／＼仰せらるべし、一念多念の争ひなんどのやうに詮なきこと論じごとをのみ申し合はれて候ふぞかし、よく／＼慎むべきことなり」とあるので知らるゝやうである。

有念無念の方は第三通に「常陸國中の念佛者の中に有念無念の念佛沙汰の聞へ候ふは僻事に候ふ」とあるやうに常陸の國に流布したやうである。元仁元年常陸稻田に於いて御製作になつたと云はれて居る教行信證信卷本にも「凡案ニ大信海ニ乃至非ニ有念ニ非ニ無念ニ」と云はれて居るところを見ると當時既にあつたやうであり、同じく有念無念を沙汰して居る末燈鈔第一通は建長三年九月廿日の御消息であるから、聖人にすれば元仁元年の五十二歳より建長三年の七十九歳に亘る約三十年に近い邪義として随分悩ませられた問題であつた。

さて一念多念とは如何なる事かと云ふと一念義は信の一念を固執して多念の稱名相續を排するのであり、多念義は多念の稱名を策勵して信の一念を認めぬのである。是れは大無量壽經の本願成就文に據れば聞其名號信心歡喜乃至一念とあるから一念往生多念無用と云ふやうになるし、又同じく第十八願文に依れば至心信樂欲生我國乃至十念とあるから多念往生一念不生と云ふやうになるのである。併し成就文の乃至一念は果して信一念であらうか、行一念ではないかと云ふ事は宗學上の問題になつて居る。法然上人は是れを行の一念とし乃至十念に結びつけて第十八願を念佛往生の願とせられたのである。併し信の一念を忘れた行の一念でもなければ又乃至十念でも

ないのである。たゞ信一念を裏に隠して、行の多念を表に出したまでである。然るに親鸞聖人は此の乃至一念を信一念に解釋し「言ニ一念者信心無ニ一心故曰ニ一念、是名ニ一心則清淨報土真因也」と云はれて、別に行一念に對しては流通分に依り「言ニ行之一念者謂就稱名遍數顯開選擇易行至極」と解釋して多念の稱名を策勵せず、一念の稱名に就いて選擇易行の至極を開顯せられたのである。實際問題として法然上人と異つた點はなし事になるのである。

有念無念とは如何なる事かと云ふに有念とは凡夫の意念に依つて彌陀を念じ、淨土往生を願生し、口稱念佛を策勵するのである。無念とは凡夫の意念を排し、唯心の彌陀己心の淨土を本として口稱念佛を排斥する方で、此の第一通に「選擇本願は有念にあらず無念にあらず、有念は即ち色彩を思ふにつきて云ふことなり、無念と云ふは形を心につけて色を心に思はずして念もなきを云ふなり、是れみな聖道の教へなり」とあり、是れに對して第三通に「聖道に申すことを惡しざまに聞きなして淨土宗に申すにぞ候ふらん」と曲解を誡められて居らるゝ殊に第三通は此の一念多念有念無念に對する教誨となつて居るのである。まづ一念多念に對しては「一念にて往生の業因は足れりと申し候ふはまことに然るべき事にて候らん、さればとて一念の外の念佛を申すまじき事候はず乃至念佛往生の本願とこそ仰せられて候へば多く申さんも一念一稱も往生すべしとこそ承つて候へ、必ず一念ばかりにて往生すと云ひて多念せんは往生すまじきと申すこと夢々あるまじき事なり」と仰有つてあります

現に有念無念に對しては「たゞ證する所は他力のやうは行者の計らひにてはあらず候へば、有念にあらず無念にあらずと申すことを惡しく聞きなして有念無念など申し候ひけると覺へ候、彌陀の選擇本願は行者の計らひの候はねばこそ、徧へに他力と申すことに候へ」と凡夫の計らひを誡められて居らるゝ。

一念多念の問題は斯様に意を得て取扱はると極めて趣きのあるものであるが、是れを極端に解釋すると嘗に往生の大事を誤まるばかりでなく、人生を誤り往生を誤り風教を害する事になるのである。既に早くも法然上人の門下に於いてすら成覺房幸西、法本房行空の破門があり、長樂寺隆寛の門人なども是れがために破斥せられたものである。一念義の方は往生の大事が一念で決定すると云ふから悪人正機を楯に取つて惡無礙に陥り、彌陀一佛の崇敬を誤つて遂に神佛を輕賤する事になり、無礙放逸に流れて世道人心を毒するやうになるのである。殊に一念義そのものが當時關東地方を風靡した真言立川流の邪義と結びついて愈々風俗を紊亂したやうである。法然上人の選述と云はれて居る『淨土布薩式』及び鎮西上人の著である念佛名義集等に其の一端が紹介せられて居るから學者の研究を希望して置く。それから多念義の方は臨終來迎を期するものであるから多念の稱名を策勵するやうになり、賢善精進に囚はるゝ結果、常に不安が伴ふものであるからどうしても諸佛等同と云ふ考へに囚はれ是れ又結果に於いて一念義のやうに反道徳を怪まぬやうになる。こうなると例に依つて延曆寺の活動となり、念佛無間の絶叫となつて日蓮宗方面の訴願ともなり、領家地頭名主の注目となり、鎌倉幕府や六波羅探題の干涉制

裁があるやうになつて來るのである。

こう云ふ聖人の御消息を見る毎に私は聖人の心境が想像せられてやる瀬ない思ひにからるゝのである。御消息の隨所に見らるゝ唯信鈔、後世物語、自力他力分別事を推讀して是れを精讀するやうに幾度も繰返され、殊に第一通に云はれてあるやうに「尙ほ覺束おぼつかなきあらば今日まで生きて候へば態とも此方こたへ尋ね給ふべし、また便にも仰せ給ふべし」とあつて、往生の一大事であるから不審があつたならば態々でも此方へ來るなり、又手紙で尋ねよと云ふ温情極まつた思召しに感激せずには居られぬのである。

第五章 念佛停止事件

御消息を拜讀すると鎌倉と云ふ文字が處々に散見するが、是れは申す迄もなく當時中央政府の所在地であつてそれが直ちに聖人の教團との交渉を意味することになる。今集の第二通に「さては鎌倉にての御訴への様はおろく承りて候」とあり、第八通に「入信房なんども不便ふびんに覺へ候ふ、鎌倉に長居して候ふらん不便に候」とあり又顯智書寫建長八年五月廿九日附慈信房義絶の御消息には「まことに斯る嘘事ども云ひて六波羅の邊、鎌倉などに披露せられたる事心憂き事なり」とあり、又「親鸞が教へにて常陸の念佛申す人々を疎んぜよと慈信房に教へたると鎌倉まで聞へんこと淺聞し〜」とあるのがそれである。而して又第四通に「念佛を止めんとする所の領家、地頭、名主の御計どもの候ふらん事よく〜やうあるべき事なり」とあるに對照して見ると官邊の消息が大概想像せらるゝやうである。そこで第二通と第九通とに依つて念佛停止事件をお話して見やう。

關東の教團には一念義に對する謬見より惡無礙の邪見に墮し神佛を輕賤し無懺放逸の限りをしたものが隨分あつた。是等の輩やぶらは音に關東教團の秩序を破壊したばかりでなく、又甚だしく社會の治安を害したものである。殊にそれが聖人の弟子門徒と云ふ念佛者のみならず、名を念佛者に籍かつて惡事を恣ほしまにし風教を亂す輩が處々に排

徇するやうになつた。そこで鎌倉幕府の目が一層光るやうになつたのである。尤も此の思想は法然上人の時代既に有つたので其のため南都北嶺方面より上奏もあり、そのため念佛禁制ともなつたのであるが今は其處までは溯らぬ事にする。

さて前に申した鎌倉云々の文字に依つて見ると何人か聖人の教法を以つて世道人心を破壊するものとして門弟子の巨頭を幕府に訴へたやうである。尠くとも性信房や入信房は其のために法廷に立つたのではあるまいか、「性信房一人の沙汰あるべきことにはあらず」とか、又「鎌倉に長居して候ふらん不便に候」とあるは性信房や入信房が此のために法の裁きを受け意外の時日を要した事を語るものであらうとおもう。「鎌倉などに披露せられたる事心憂き事なり」とあり、又「常陸の念佛申す人々を疎んぜよと慈信房に教へたと鎌倉まで聞へんことと淺間し〜」とあるを見ると、或は慈信房自身が逆宣傳をやつて聖人及び門弟子を幕府に訴へたものではあるまいか。一身の利害のためには先輩長老を賣り、親をも陥れまじき所爲をなすなどは如何にも人間の淺間敷しきことである。

さて第二通は念佛者の非違を幕府へ訴へ出た件に就いて某年六月一日性信が聖人へ上書した。それが一ヶ月餘り経つて聖人の手に届いたのである。それで七月九日御返事を書かれたものである。性信は下總の飯沼に居つたものであるが其のために態々鎌倉に出掛けて釋明をしたらしい。此の御文に「違はず承りて候へしに別の事はよ

も候はじと思ひ候ひしに御くだり嬉しく候」とあるは其のためであらうとおもう。然かし此の事件は法然上人の時代より屢々繰返されて居る問題であるが、また自分等に關しては未だ事新らしいものである。それで例へ性信房が槍玉に擧げられたにしても性信房一人で濟む問題でなく念佛者一般に裁きを受けねばならぬ事件であると慰められたのである。而して以前も念佛を禁制せられた事があつたが、それで世道人心が立ち直つたかと云ふにさうではなく依然曲事や悪事は絶へなんだものである。それを思ふと矢張り念佛に徹底して世道人心の改善を念願したが最善の策であると諭されたのである。要するに御身に限らず念佛者は自分自身のためと思はずとも朝家國民のために念佛を申さるゝがよい。若し往生不定と思召さん人は自分自身のために念佛を申さるゝがよい。念佛に徹底しさへすればそれが朝家國民のためにもなり、又自分自身の往生一定ともなるのであるから佛の御恩を思ふて益々念佛せねばならぬ。そうするとそれが取りも直さず「世の中安穩なれ佛法弘まれ」と云ふ意味になるのであると云ふ思召しである。是れは信仰第一主義に依つて眞俗兩全を期する指導精神として、最も有り難く又獨特の價値を有つものである。私は此の思召しに徹底し體驗を積まれんことを期待し勸奨するものである。お念佛を心に入れてとか或は世の祈りに心を入れてとか耳慣れぬお言葉もあるが總べて此の意味に解釋して貰ひたいのである。

第九通は年時の記載はないが是れは第二通の後性信宛てに書かれたものである。即ち幕府への訴訟事件が無事

解決した後、性信と同地方即ち下總邊りに住んで居つた源藤四郎と云ふものが性信の上書を携へて京都に聖人をお尋ねした事がある。その幸便に托してお書きになつた御消息が此の第九通である。「下らせ給ひて後」とあるのは鎌倉より下總へ引揚げられて以後はの事であり、「此の源藤四郎殿にも思はざるに遇ひ參らせて候便の嬉しさに申し候」とあるのは此の意味である。

源藤四郎の名は二度も繰返されてあり、態々京都へ尋ねて行く程の人であり、且つ聖人御往生後の翌々年文永元年五月十三日と同四年九月七日と前後二回越後の惠信尼より京都の彌女姫に遣はされた御手紙にとう四郎とあり又□□四郎と出て居るのは藤四郎と源藤四郎に相違ない。是れで見ると聖人の御生前より御往生後御遺族にまで關係を以つて居るのであるから、是れは法門關係以外家庭的に何か深い關係のあつた人ではなからうかとおもうのである。

さて此の御消息を拜見すると先づ鎌倉に於ける念佛訴訟事件の落着いた事をお喜びになり、更らに此上は益々念佛も興隆するやうにならうと喜ばれて居らるゝ。而して御身の料即ち性信房一身上の疑惑は一掃せられたのであるから、此上は念佛に徹底して念佛誹謗の輩に對して又現世來世に對しても同一念佛者となつて世の中の安穩と佛法の弘まるやうに期待せねばならぬと云はるゝのである。「祈りあはせ給ふべく候」とか「世の人々を祈り」とかあると祈禱でもせよと仰有るやうに聞へるが斷じてそう云ふ意味ではない。親鸞聖人の大信仰と云ふ大

處高處に立ちて此處は文字に囚はれず事のためにか若くは期待すると云ふ極く軽い意味に考へて貰ひたいのである。何分誤解中傷讒訴の眞只中に居られた聖人であるから、或は誤解せられ易い筆法も用いられた事があつたかも知れぬ。そこが私の謂ふ大處高處に立たねばならぬと云ふところである。

最後の「聖人の廿五日の御念佛も詮する所はかやうの邪見のものをたすけん料にこそ申し合はせ給へ」云々とあるのは師範法然上人の御往生建曆二年正月廿五日を記念し追憶する意味にて、聖人の御在世中各地の御門徒の間に「廿五日の御念佛」と云ふものが勤つたのである。法然上人御在世の御苦勞を追憶し、報恩の營みをするのであるが、それが取りも直さず邪見の者を導くことにもなり、相共に念佛相續して益々自行化他の因縁を結ぶこととなる。そうして初めて「廿五日の御念佛」の所詮があると云ふものである。それで「よく々念佛誹らん人を助かれと思召して念佛し合はせ給ふべく候」と仰有つたのである。

追申として入西房にも別便遣はしたのであるけれども同様の事を繰返すに過ぎないから然るべく傳へて呉れとある。入西房は妙源寺本や萬福寺本、交名牒にも載つて居る聖人の直弟で常陸に居つたものである。唯信と郷國は違つても此の訴訟事件に何か關係があつたものゝやうにおもう。

第六章 造惡無礙の邪義

二八

我が教團に於ける異義異計の中でも雷に往生の一大事を誤るばかりでなく、尊い一身を誤り延いては社會の治安を害すると云ふ大影響を有つものは此の造惡無礙さうあくむげの異計である。今本集の第四、第五通に依つて是れを解説して見やうとおもう。

此の造惡無礙の思想は何時何人の手に依つて何處に流布せられたものか、並に其の主張と是れに對する聖人の對策を考へて見ねばならぬ。聖人の御消息中此の問題に關係して居るものは今の第四第五の二通と、外に末燈鈔第十六、第十九の二通と都合四通あるやうにおもう。而して末燈鈔の第十九通には明かに建長四年二月廿四日と發信年時が記されてある。第十六通は單に十一月廿四日とあり、今の第四、五通は又單に同じく九月二日とある。是れは建長四年の十一月若くは九月でないにしても其の前後であらねばならぬ。建長四年は聖人八十歳の御時である。此の當時は未だ慈信房善鸞が常陸奥郡地方にあつて、京都の父聖人と關東門弟子との間に介在中傷、離間、讒誣等有らゆる術策を講じて居つた時代で、傷ましくも聖人は未だ尙ほ慈信房の術策に乗つて居られた時である。それから四年の後その權謀術策が暴露せられて建長八年五月廿九日聖人八十四歳父子義絶となり、その旨

を同時に慈信房と性信房とに通告せられたのである。そこで此の御消息集の第四、五通は建長四年の九月二日か然らざるにしても其の前後一兩年のものであらう。而して第五通は慈信房が信願房の造惡無礙を讒訴したに對して聖人は其の意外に驚かれて懇々その誤りを諭され、同時に其地の念佛者に警告を發せられたものが第六通ではあるまいか。私は常に僅少の材料で想像を逞くすることの危険を戒めて居るものであるが、此の兩通は斯く推定しても無理はなからうとおもう。

それから慈信房の云ふ惡無礙の主張者信願は如何なる人かと云ふに親鸞聖人門侶交名牒に依つて見ると光明寺本に依る常陸の信願と妙源寺及び萬福寺本に依る下野那須の信願と二人ある。その他孫弟子にも三四人あるがこれは年代の關係上直弟子の信願に相違ない。その直弟子二人の信願に就てもその何れかに就ては見當もつき兼ねるが、慈信房と接觸して居つた關係上下野にしては餘りに遠く常陸在住の信願とするが穩當のやうである。本願寺通記の著者玄智は惡無礙の骨張者として下野那須住の信願を指名し第五通に出づる信願として居るが尙ほ考慮の餘地があるやうである。而して此の惡無礙の思想は慈信房が摘發して居る關係上常陸地方に流行したものと見ねばならぬが、然かし又慈信房であるだけに其の事實も疑はしいのである。まづ第五通を見るに惡無礙の主張を述べられて「信願房が申す様とは心得ず候」とある御言葉に着眼して考へると、聖人に取つては意外の事そんな説をなすとは思はれぬと云はるのである。慈信房は曾ては聖人の高弟眞佛房、性信房までを中傷した程のも

のである。同地方に住んで利害關係があるからには信願房をも槍玉に擧げぬとも限らぬ。「信願房が申す様とは心得ず候」と仰有つたのは如何にも思はるのである。信願房の異義が外に立證せられぬ限り、私は此の第五通を慈信房の中傷離間策と見たいのである。信願房を且らく別としても惡無礙の主張者としては末燈鈔に指摘して居る通り、常陸北の郡には善證房（一に善乘房に作る）信見房など云ふ異解者があつたのである。殊に信見房に至つては聖人も「淨土の教も知らぬ信見房などが申す事に依つて僻様にいよく成り合せ給ひ候ふらんを聞き候こそ淺間敷しく候へ」と仰有つて居らるゝ位であるから淺見者流不如實者であることは容易に想像し得らるゝのである。

さて惡無礙の思想と云ふのは第五通にある通り「信願房が申す様は凡夫の習ひなれば惡きこそ本なればとて思ふまじき事を好み、身にもすまじき事をし、口にも云ふまじきことを申すべき様に申され候こそ信願房が申し様とは心得ず候」とあり、また「惡き身なればとて殊更に僻事を好みて師のため善知識のために惡しき事を沙汰し念佛の人々のために咎となるべき事を知らぬは佛恩を知らず、よく計らひ給ふべし」と懇ろに誠めて居らる。更らに末燈鈔には「我れ往生すべければとて爲まじき事をもし、思ふまじき事をも思ひ、云ふまじき事をも云ひなどする事は有るべくも候はず」と諭され、「目出度き佛の御誓ひのあればとて態とすまじき事をもし、思ふまじき事をも思ひなどせんは能く此の世の厭はしからず、身の惡き事をも思ひ知らぬにて候へば念佛に志

もなく佛の御誓にも志の在しませぬにて候へば念佛せさせ給ふとも其の御志にては願次の往生も難くや候ふべからん」など誨へられ、「酔ひも醒めぬさきに尙ほ酒を進め、毒も消へやらぬに愈々毒を進めんが如し、藥あり毒を好めと候ふらんことは有るべくも候はずとこそ覺へ候ふ」と到れり盡せりの教誨である。

第五通は要するに惡無礙の主張を擧げて信願房の計らひとは思はれず、斷じて又自分の申分ではなく、例へば様な説をなすものがあつても一般の念佛者にとつて妨げとなる程薄弱な信仰ではないから、その人を憎む事をせず、愈々念佛相續して其人達を導き合ふやうにせねばならぬと仰有つて居らるゝ。最後の「かの人を憎まずして念佛を人々申して助けんと思ひ合はせ給へ」とこそ覺へ候へ」と云ふ文字は實に聖人の溫情と熱誠の籠つた御精神と感激せらるゝのである。此の思召しを常陸地方の念佛者に對して諭されたのが第四通であると窺はるゝ。彼等にすれば往生の一大事は聞其名號の一念で決定し、罪業深重を目當ての本願であつて見れば最早や信仰上の拘束はなし、凡夫の習はしであるから惡業も碍りなしなど速斷するは常に陥り易き誤解である。その結果は諸佛菩薩や神明には自然用事もなし求むる所もないのであるから是れを輕蔑し疎外するやうにもならうし、凡夫の習はしとして惡業造罪得りなしと許されてあるのであるから益すゝそれが昂するやうになる。此の謬見が人生を誤り社會の治安を害するのであるから念佛の人々御中として常陸地方の門徒を教誨せられたのである。

まづ私共が曠劫多生の間に於いて流轉輪廻を重ね自力修善の非を知つたと云ふ事も、また彌陀の御誓ひに遇ひ

奉つたと云ふ事も、すべて其處には諸佛菩薩の御恩を大變受けて居るのである。又その間には八百萬の神々が或は佛法の守護者となり或は權現となつて私共を引接して居らるゝのである。その神明こそ佛法と云ふ大心海中のものである事を思はねばならぬ。それで「佛法を深く信する人をば天地に在します萬の神は影の形に添へるが如くして護らせ給ふ事にて候へば、念佛を信じたる身にて天地の神を捨て申さんと思ふ事ゆめ／＼なき事なり」と誨へて居らるゝのである。而して惡無礙に對しては「念佛せさせ給ふ人々の事彌陀の御誓ひは煩惱具足の人のためなりと信ぜられ候ふは目出度きやうなり、但し惡きものゝ爲めなりとて殊更に僻事を心にも思ひ身にも口にも申すべしとは淨土宗に申す事ならねば人々にも語ることを候はず」と諭され、「かゝる惡き身なれば僻事を殊更に好みて、念佛の人々の障りとなり師の爲めにも善知識のためにも咎となさせ給ふべしと申すことは夢々なき事なり。彌陀の御誓ひに値ひ難くして遇ひ參らせて佛恩を報じ參らせんところ思召すべきに、念佛を止めらるゝ事に沙汰しなされて候ふらんこそ返へす／＼心得ず候」と誨へて居らるゝ。而して何時も佛恩と云ふ事を繰り返して居らるるが本當に此の異義邪計は佛恩と云ふ事に思ひ到らぬからである。報佛恩に徹底してさへ居れば斷じて斯る惡無礙の思想には陥らぬのである。而して聖人は常に幕府を初め領家、地頭、名主の手前を考慮せられて居られたのであるが、果然是れが導火線となり觸がて念佛訴訟事件となつたやうである。

第七章 慈信房の秘事法門

慈信房善鸞宛ての御消息は今集に第五、六、七と三通出て居るが、第五通は恐らく信願房に對する慈信房の謾誣と思はるゝ惡無礙の異計であるが、餘の第六、七の二通と第八通の眞淨宛てのものは慈信房それ自身の邪義に對する御教誡である。發信時は第六通が十一月九日であり、第八通が正月九日であつて年時はないが當該事件に依つて慈信房を義絶せられたのが建長八年五月廿九日であるから其の以前に相違なく、従つて第六通は建長七年十一月九日であらうし、第八通は建長八年正月九日であり、第七通は年時不詳であるが是れも其の前後に相違なからうとおもう。而して第八通の宛名になつて居る眞淨房と云ふは門弟交名牒で見ると光明寺本に出て居る常陸鹿島住の順信の附弟になつて居る眞淨であらうとおもう。然し他の妙源寺本萬福寺本では信淨となつて居るが是れは眞淨の事で恐らく誤記であるまいかとおもう。

さて慈信房は聖人の長男であるが覺如上人が口傳鈔に云ふて居らるゝ男女六人の公達の母である惠信尼とはなさぬ仲の間であつたやうである。その事は前に申した建長八年五月廿九日慈信房義絶の御消息で知れる。此の家庭的に恵まれなかつたと云ふ事と、聖人御歸洛後その長男であり乍ら關東教團に於いても恵まれなかつたと云ふ

事が此に慈信房をして反逆者たらしめたものであらう。然るに慈信房に就ては其の史實も主張も餘り知られて居らない。たゞ僅かに此の第六、七、八通の御消息と慈信房並に性信宛て義絶通告の御消息と外に從覺の慕歸繪詞及び乘專の最須敬重繪詞に依つて知る位のものである。是れに依つて慈信房は祕事法門の創始者であり、又善知識たのみの主張者ではなかつたらうかと云ふ見當がつくまである。

慈信房は父聖人の御歸洛後、澤山の門弟子と共に關東に居残つたものでもあり、また幾度か京都との間を往來して父聖人を尋ねても居る。彼自身にすれば聖人の實子として關東の教團に居残つて居るのであるから第二の親鸞として自らも任じて居つたらうし、また門弟子からも推舉せらるゝであらうと豫期して居つたらうと思はれる。然るに宗教は血よりも法である。關東の教團には先輩格の眞佛、性信と云ふやうな人があつて仲々自分に廻つて來そうもない。そこで彼れは目星しい長老を中傷し排撃して聖人と長老門弟を離間すると同時に、また親子の情を利用して更らに門弟子と念佛者信徒との間を割いたのである。前者は即ち第七通に見ゆる眞佛房、性信房、入信房の讒訴となつたのであり、第五通に出づる信願房も或は其の類ひであつたかも知れぬ。後者は即ち祕事法門或は夜中の法門と云はるゝものとなつたのである。而して對門弟子の離間、中傷、讒誣は終に成效もせなかつたやうであるが對門徒の祕事法門の方は相當の目的を達して聖人を苦しめ其の結果遂に親子の義絶とまでなつたのである。第七通は即ち長老門弟に對する讒誣に就いての御消息であり、第六、八通は門徒に對する祕事法

門宣傳に就いての御消息である。

差し當り第七通は慈信房の眞佛房、性信房、入信房に對する讒訴である。眞佛、性信は屢々申して居るが入信は交名牒の何れにも見ゆる常陸奥郡住の人であるが、斯う并び擧げらるゝ所を見ると眞佛、性信と共に巨頭の一人であつたと云はねばならぬ。慈信房を信じ切つて居らるゝ聖人はマンマと此の讒訴に乗られて、悲痛の叫びを擧げられたのである。致し方もないと諦められたものゝ「今は人の上を申すべきにあらず候、よく心得へ給ふべし」と仰有つて此上は人の身の上の沙汰をせんよりは自分自身の用心をせねばならぬと誠めて居らるゝ。が此の底知れぬ聖人の温情には感激せずには居られぬ。併し此の第七通は折角の御消息としてどうも物足らぬ節がある。事に依ると是れは追申の文で此の先きに本文があつたのではなからうかとおもふ。併し又眞佛、性信等の轉向と云ふ事は何分大事件である。そんな大事件を本文に書かず追申として書かれる筈もないから是れで充分かも知れぬ。兎に角疑問と云ふ事にして措かう。

さて第六、八通に現はれて居る慈信房の祕事法門と云ふは建長八年五月廿九日慈信宛の御消息に「又慈信房の法門の様名目だにも聞かず、知らぬ事を慈信一人に夜親鸞が教へたるなりと、人に慈信房申され候とて、是れにも常陸、下野の人々は皆親鸞が嘘ら事を申し合はれて候へば今は父子の義はあるべからず候」とある通り、慈信房が父聖人より夜中たゞ一人傳授せられた法門であると云ふ所から夜中の法門とも又祕事法門とも

呼ばるゝ譯である。慕歸繪詞に「或る冬の事なりける爐邊に對面あつて聖人と慈信法師と御顔と顔とさし合はせ御手と手を取り組み、御額を指合せて何事にかものを密談あり、其時しも顯智ふと参りたれば兩方へ退き給ひけり」とあるのを以て父子密傳の事實あつたものとして越前の三門徒如道一派では却つて是れを利用し、慈信房を開祖と仰ぎ、祕事法門を骨張して居つたのである。併し是れは何かの間違ひで父子義絶までした慈信房宛ての御消息、並に是れを同時日性信房に通知せられた御消息が何よりの證權である。性信房宛ての御消息に「まづ慈信が申し候法門の様、名目をも聞かず、況んや習ひたる事も候はねば慈信に私かに教ゆべき様も候はず、また夜も晝も慈信一人に人には隠して法門教へたる事も候はず、若し慈信に此事申し乍ら嘘ら事を申し隠して人にも知らせずして教へたる事候はゞ三寶を本として、三界の諸天善神、四海の龍神八部、閻魔天界の神祇、冥道の罰を親鸞が身に盡く被り候ふべし」と仰有つてあるのを見れば聖人の心境は明白なものである。慕歸繪詞の事實は是等の法門と關係のない一家の私事であらうか、偶々それが祕事法門に利用せられたまでに過ぎぬであらう。

第六通の御消息では何んでも慈信が關東に下るなり父子密傳の法門など稱して、從來の信仰を悉く否定し廻つたものであるから隨分是れに籠絡せられたものもあつたらしい。現に大部と云ふ常陸那珂郡の一地方では篤信者の中太郎入道に附いて居つた同行九十人計りのものが中太郎入道を棄てゝ慈信房の方に走つたと云ふ事である。聖人は大變是れを悲まれて「詮ずるところ信心の定まらざりけると聞き候」と豫ねて金剛堅固の信心ならざるが

致すところであると仰有つて居らるゝ。今日でも同行信者と云はれ乍ら事に依ると何かに迷ふものを見るが、是れなども矢張り信心堅固ならざるため、全く聖人の仰せらるゝ通りである。そこで又例の唯信鈔、後世物語、自力他力分別事などの精讀を勧めて居らるゝ譯である。

此に「二河の譬諭ひひゆ」など書きて方々へ下して候ふ」とあるが、是れに就いて鳥渡申して置かねばならぬ事がある。聖人は時折り門弟や門徒教化のために短篇の註釋物や聖教の延書の様なものをお授けになつた事がある。此の「二河の譬諭」と云ふものも其の一つであつて、云ふ迄もなく善導大師の散善義に出て居る二河白道の延書である。建長六年十一月十八日八十二歳の時手記せられたものであつて、常陸那珂郡鷲子の照願寺に傳へられて居つたものである。曾つては水戸黃門光圀卿も御覽になり、畠山牛庵と云ふ人の添狀もあり、又寛文十一年二月廿一日に書いた山縣源七郎なるものゝ山來書もあつたのであるが、今は其の眞蹟が行衛不明となり寫本だけが該寺に保存せられて居ると云ふ事である。

第八通は常陸奥郡に居る眞淨房より慈信房が門徒を煽動し、惑亂するに依り處にも居れぬと云ふ事を訴へて來た上書に對する御返事である。是れに依りて又慈信房の異義なるものも知れる譯である。聖人は眞淨の苦衷をお察しになり「詮ずる所その處の縁ぞ盡きさせ給ひ候ふらん、念佛を障へらるなど申さん事に、ともかくも歎き思召すべからず候、念佛止めん人こそ如何にもなり候はぬ、申し給ふ人は何か苦しく候ふべき」と仰せられて念

佛を誹謗する人こそ罪はあれ、念佛者に何の咎があらうぞと慰められ、「ともかくも佛天の御計らひに任せ参らせ給ふべし、その處の縁盡きて在しませ候はゞ何の處にても移らせ給ひ候」とあつて、奥郡地方は御縁も盡きたのであらうから是れも佛天の御計らひと思召して轉地布教を勸めて居らるゝのである。

さて慈信房の異義と云ふは此に云はれて居る通り「餘の人々を縁として念佛を弘めんと計らひ合せ給ふこそ夢々あるべからず候」とあり、また「これよりは餘の人々を強縁として念佛弘めよと申すこと夢々申したること候はず、極れる僻事にて候」とあるがそれである。餘の人々を強縁としては阿彌陀如來の本願以外の餘の人即ち善知識を強縁とする事である。覺如上人の改邪鈔に出て居る通り阿彌陀佛は他にあるものではなく善知識の胸に在しますのである。それが生きた佛で其の善知識の佛と一念領解が出来たのが淨土の業事成辨したと云ふものであると説き、此の善知識をたのむのが即ち如來をたのむ事である。而して善知識の口傳口授以外に如來の救濟はないものとして自身一人此の唯授一人の口決を受けたものであると云ふのである。「慈信房が様々に申し候なるに依りて人々、御心共の様々にならせ給ひ候よし承り候、返す／＼不便の事に候」と仰有り、また「様々に慈信房が申すことを是れより申し候と御心得候、夢々あるべからず候」とも申され、更に又「奥郡の人々の慈信房にすかされて信心みな浮かれ合ふて在しませ候ふなること返す／＼哀れに悲しう覺へ候」と悲痛な叫びを擧げて居らるる而して又一しほ大悲を仰がれて「それも日頃人々の信の定まらず候ひける事のあらはれて聞へ候、返へす／＼

不便に候ひけり、慈信房が申す事に依つて人々の日頃の信のたじろぎあふて在しませ候ふも詮する所は人々の信心の眞實ならぬ事のあらはれて候」と懇ろなる御教誨をなされ、重ねて唯信鈔、後世物語を拜讀するやうお勧めになつて居らるゝのである。

此の第八通に「入信房なども不便に覺へ候鎌倉に長居して候ふらん不便に候」とあるが、是れは篤と考へねばならぬ事實であらうとおもう。察するところ入信房は慈信房のために讒訴せられたものであらう。そのために彼れは鎌倉政府の注意人物となり、或は裁きを受けたがために自然長居したので、聖人はそれを氣の毒がられた意味だらうとおもう。是れに就いても慈信房の惡疎なる術策には驚かるゝ次第である。

慈信房の行狀に就ては慕歸繪詞と最須敬重繪詞等で大體は知れるのであるが、正應三年覺如が關東教化の砌り相模の餘綾山中で瘡を患はれた事がある。その時慈信は護符などを勧めたと云ふのであるから當時東北地方を風靡して居つた修驗道や陰陽道に關係があつたものに相違ない。即ち淺薄な現世祈禱を事として佛教の行儀を亂し聖人の教化を誤解せしめたものであらう。慕歸繪詞にも「神子巫女の主領となりしかば」と云ひ、又「邪道を事とする御子になられて別解別行の人にてまします」とあり、又最須敬重繪詞にも「巫女の輩に交て佛法修行の儀に外れ外道尼乾子の様にて在しければ」とあるに依つて其の一斑が知らるゝのである。

第八章 十二光佛義

四〇

最初に鳥渡申した通り我が聖人が門弟子に交附せられたものには異つた二三の様式があつたやうである。末燈鈔御消息集等の大部分をなす消息體のものは云ふまでもないが、外に教語體のものと簡単な註釋體のものがあつたのである。末燈鈔の第一、第三、第四、第五の各通と第二十通などは聖人の教語であり、本集の第十通に見ゆる十二光佛の御事は第六通に出づる二河の譬諭と共に聖人の手に成つた簡単な註釋の一つであるとおもう。

此の第十通は某年の十月廿一日に唯信房の懇望に依り十二光佛の大意をお書き與へになつた時の副狀であるが無礙光佛が本尊であると云ふことを知るばかりで、肝心の本文が如何なるものなるかは知る由もなかつたのである。然るに去る大正七年大谷派の故山田文昭氏に依つて其れが信濃國松本市正行寺に存在せることを發見せられたのである。遺憾なことには眞蹟ではないが文應元年十二月二日聖人八十八歳に書かれたものを五十一年の後應長元年十二月廿六日同寺第三代の了智と云ふ人が寫傳したることになつて居る。而して此の寫傳の本文に「十二光のやうおろく書き記して候也、詳しく申し盡し難く書きあらはし難し」とあるは今の御消息第十通に「詳しく書きまいらせ候ふべきやうも候はず、おろく書き記して候ふ」とあるに相當して居るから彼此不離一聯のもの

であることが知らるゝものである。而して此の正行寺と云ふは聖人の門弟で常陸の北郡に居つた法善と云ふものゝ開基で西佛、了智と次第して居るから、文應元年十二月二日の御眞蹟を五十一年目に了智が書寫したものととして年代も相當するやうである。御消息宛名の唯信と云ふは聖人の門弟の中に二人ある。常陸奥郡の人と奥州會津の人であるが何れの方か分らない。而してそれがどうして了智の手に渡り正行寺に傳持せられたかは總べて不明である。然し元來「十二光佛の御こと」と呼ばれて無題無名のものであつたのが了智に依つて「彌陀如來名號德」と稱せらるゝやうになつたことだけは確かである。

今此の「十二光佛の御こと」即ち「彌陀如來名號德」の内容を見るに十二光佛の一々に就いて簡易な解釋を施し、次に歸命盡十方無礙光如來と南無不可思議光如來の十字九字の尊號に結歸して其の德を力説して居らるゝのである。即ち十二光佛に就いて一往の説明を終り、「十二光のやうおろく書き記して候ふなり詳しく申し盡し難く書きあらはし難し」と結び、更に無礙光に就いて世親菩薩の往生論に依り歸命盡十方無礙光如來の德を説き、次に難思、無稱光に就き曇鸞大師に依り南無不可思議光佛を立てゝ曇鸞の不可思議光佛は即ち世親の無礙光如來なる事を説かれてある。而して「阿彌陀佛は智慧の光りにて在しますなり、此の光を無量光佛と申すなり無礙光と申す故は十方一切有情の惡業煩惱の心に障へられず、へだてなき故に無碍とは申すなり、彌陀の光りの不可思議に在します事をあらはし知らせんとて歸命盡十方無礙光如來と申すなり、無碍光佛を常に心にかかけ稱へ奉れば

十方一切諸佛の徳を一つに具し給ふに依りて彌陀を稱すれば功德善根きはまり在しませぬ故に龍樹菩薩は「我説彼尊功德事、衆善無邊如海水」と教へ給へり、かるが故に不可思議光佛と申すと見へたり不可思議光佛の故に盡十方無礙光佛と申すと世親菩薩は往生論にあらはせり」とあるが、此の釋は聖人の主著教行信證や尊號眞像銘文一念多念證文と彼此同じ思召して、聖人の御自作として寸毫疑ひはないのである。況んや前に申した通り唯信宛の御消息に「人々の仰せ候ふ十二光佛の御事のやう書き記して下し參らせ候ふ、詳しく書き參らせ候ふべきやうも候はず、おろ／＼書き記して候ふ」とあるそのものであつて、東國門弟の懇請に應じて十二光佛の概略を書いて、お贈りになつたものに相違ないのである。

さて十二光佛に就き別して無礙光佛と不可思議光佛との二つに結歸し、九字十字の尊號として其の徳を御讚嘆なさつたと云ふ事に就いて、私は此に光明本尊と併せ考へたいのである。聖人當時の本尊は南無不可思議光如來と云ふ九字名號か歸命盡十方無礙光如來と云ふ十字名號であつた。此の尊號と三國傳燈の祖師を圖畫した眞像とに銘を書かれて其の銘文を註釋せられた尊號眞像銘文と云ふ聖人の著作がある。その眞蹟が現に伊勢の專修寺と越前の法雲寺とに傳へられて居る。此の九字十字の尊號は信仰の對象であつて、是れを印度、支那、日本の三國に亘つて傳承せられた祖師の眞像と共に是れを一幅或ひは三幅に收めて禮拜して居つたものが、即ち光明本尊と云ふものである。中央に九字或ひは十字の名號を安置し、兩側に眞像が畫かれてある。時には此の眞像が別幅に

なつて居るものもあるが、本尊として禮拜と報恩とを兼ねたものである。宗祖當時から行はれたもので、其後と云へども門弟子や孫弟子の間には頗る尊重がられたもので、現に東國地方には随分保存せられて居るやうである。此の九字十字が何故に本尊となり禮拜の對象になつたかと云ふに、それは聖人の十二光佛觀に依るのであつて、此の見解を外にして九字十字の尊號と云ふものは考へられないのである。従つて此の十二光佛の註釋と云ふものは如何に重寶なるものであり、教團に如何に大光明を興へて居つたかと云ふことを容易に想像することが出来るのである。

第九章 如來二種の廻向

四四

御消息集の大部分が當時の異義邪説に對する聖人の御裁斷であると云ふ型になつて居るが、最後の第十一通は前の第十通と共にそれに關係のない純な宗意安心の御教諭であつたやうに思はれる。此の第十一通は血脈文集の第三通にも載つて居る慶西宛ての御消息である。慶西は親鸞聖人門弟交名牒で見ると妙源寺本では常陸北郡の由下と云ふ處になつて居り光明寺本では奥州住になつて居り、また萬福寺本では下總室下の住人となつて居る。是れは慶西が時々常陸、下總と居所を變更したのか、それとも常陸、下總、奥州に同名異人の慶西なるものが居つたのか其の邊は不明である。或は性信系横會根門徒に依つて編集せられたものと思はるゝ血脈文集に慶西宛ての御消息が採擇せられて居るので下總室下の住人と見るのが穩當かとも思ふが、此では交名牒の中でも最も古く比較的信用の出来る妙源寺本に依つて常陸北郡由下の住人として置く。

此の第十一通は慶西が宗意安心の二三點に就いて聖人にお尋ね申上げたに就ての御返事である。御返事の次第に依つて見ると質疑が四項目あつたやうである。一つが第十七願の思召しで、二つが第十八願の往相廻向の大信心と等正覺の所由、三つが義なきを義とする佛智不思議の事、四つが來迎に因んで來の字の思召しで以上四つに分れて居つたやうにおもう。

「諸佛稱名の願と申し、諸佛咨嗟の願と申し候なるは十方衆生を勧めんためと聞へたり、また十方衆生の疑心を止めん料と聞へて候らふ。彌陀經の十方諸佛の證誠のやうにて聞へたり。詮する所は方便の御誓願と信じ參らせ候」とあるは第十七願の思召しである。第十七願は十方無量の諸佛に依つて眞實の不行たる南無阿彌陀佛の御名が稱讚せらるゝと云ふ御誓ひである。十方の諸佛が讚嘆し稱へるのであるから絶對の確實性を有つて居る。そうするとそれが即ち十方衆生を勧めることになり、又それに依つて疑惑が一掃せられる事になるのである。是れが阿彌陀經の十方諸佛の證誠と云ふものであるが、世間でも何か事が起つた場合に、證據と云ふもの程たのみになり力強いものはない。併し證據そのものが主眼目的ではないのである。今もその通りで第十七願は私共を彌陀の願海に誘引せんがための證據となるのである。「詮する所は方便の御誓願と信じ參らせ候」とあるは此の思召しである。聖人も唯信鈔文意と云ふものを書かれて「凡そ十方世界に普く弘める事は法藏菩薩の四十八の大願の中に第十七の願に十方無量の諸佛に我名をほめられ稱へられんと誓ひ給へる一乘大智海の誓願を成就し給へるに依つてなり、阿彌陀經の證誠護念の有様にて明かなり」と仰つたのも又この思召しである。つぎに「念佛往生の願は如來の往相廻向の正業正因なりと聞えて候、まことの信心ある人は等正覺の彌勒と等しければ如來と等しとも諸佛の讚めさせ給ひたりとこそ聞えて候へ」とあるは第十八願に依つて往相も還相も如

來の廻向なる事を示し、正定聚の益を説かれたものである。念佛往生の願と云ふは申す迄もなく第十八願の事である、正業正因と云ふは第十八願の至心信樂欲生の三心で、言葉を換へて云へば如來廻向の信心である。此の信心が往生の正業正因となり、證大涅槃の曉は躰がて又還來穢國の悲用を起し、無限に衆生を濟度すると云ふのが還相廻向と云ふものである。而して此の往相も還相も如來廻向のものであると云ふのが聖人の教義である。教行信證に「謹案淨土眞宗有二種廻向一者往相二者還相就往相廻向一有眞實教行信證」と仰有つて、往相即ち淨土往生の相狀から眞實の教も行も證も出て來るのであるとして、悉く此の四法に攝めて仕舞はれ、教と云ふは「眞實教を顯さば大無量壽經是れなり」とあり、行と云ふは第十七願諸佛咨嗟の南無阿彌陀佛の不行である。信と云ふは第十八願の至心、信樂、欲生の三心であり、證と云ふは第十一願の必至滅度の眞實報土である。而して是等の總ては如來の廻向で凡夫の量り知るところではないのである。正業正因である信心までが如來よりの賜はりものであつて見れば、最早や人爲で計ふべきではない。往生一定の上は正定聚の人で躰がて佛になると云ふ彌勒と同じ位に居るのである。人間生活を營み乍らも救はれた身であるから其の點に於ては如來と等しいものであると諸佛も讚嘆せられた次第であると仰有つたのである。

また「如來の本願を信じ候ひぬる上には義なきを義とすこそ大師聖人の仰せにて候へ、かやうに義の候ふらん限りは他力にはあらず自力なりと聞えて候乃至義と申すことは自力の人の計らひを申すなり、他方には然れば

義なきを義とす候ふなり」とは他力義の本質を述べられたものであつて、聖人の御消息に於いて屢々繰返され居らるゝ處である。末燈鈔第二通、第七通、第九通、第十通に依つても知らるゝ如く既に佛智不思議として信する上は兎角計ふべき筈のものでなく、總ての計らひを棄てゝ如來の誓願におまかせするのが本當の念佛者と云ふべきものである。大正四年十二月十日午後四時十分私の父が臨終の砌り絶叫した最後の一言が「たゞ不思議と信じつる上はとかく御計らひあるべからず候」と云ふ末燈鈔第九通教名房宛ての御消息に見ゆる御言葉であつた。私は是れに誨へられて現在は信仰上の一切に於いて安住して居る譯である。兎角の計らひをするのが義と云ふものであり、それが自力であるから無論他力の救済を冒瀆して居ることにもなり、佛智を不思議とせぬ逆行爲である。それで念佛者はどうしても聖人が淨信房に答へられたやうに「佛智不思議と信せさせ給ひ候ひなば別に煩はしく兎角の御計らひあるべからず候」と云ふ思召しを體認し信賴せねばならぬ。佛智不思議と信じ兎角の計らひを雜へないでこそ金剛堅固の信念に住する事も出來るのである。

それから最後に來と云ふ字に對する御釋がある。來は來迎の來で如來の御來迎とか觀音勢至の御來迎とか申して淨土より來つて衆生を迎へ取らるゝ事になつて居るが聖人の御見解は斷然此等の型を破つて居らるゝ。聖人は還相廻向の見地に据つて「來の字は衆生利益のためには來ると申す」と仰有つて、淨土に往生したものが衆生濟度のために大悲を起して再び此の世界に還つて來る、それが來と云ふものであると仰有つて居らるゝ。即ち還つ

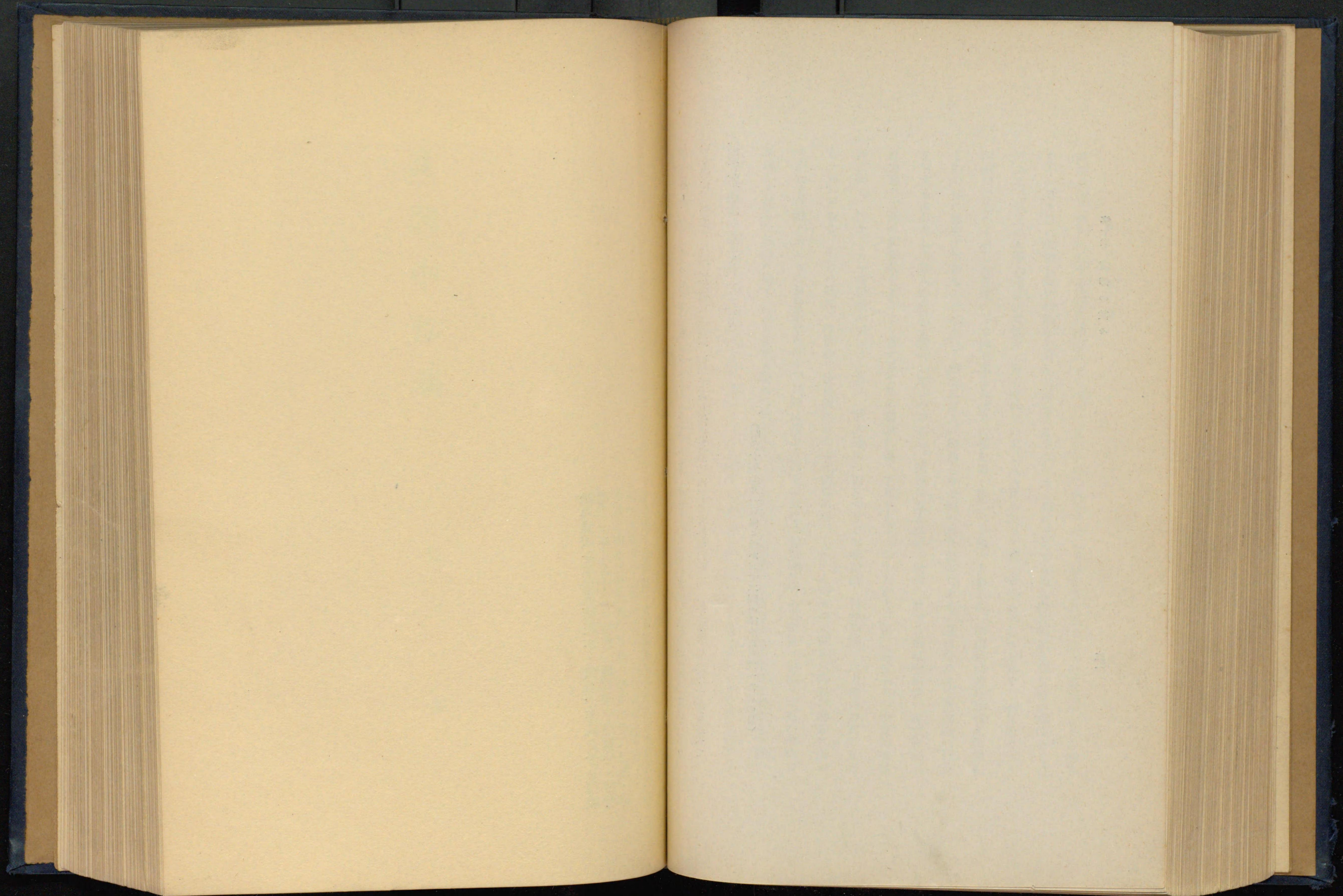
て來るのであるから「きたるともかへるとも申すと見えて候」と云はれた譯である。前に往相廻向の正業正因と仰有つて第十八願の思召しを述べられ、最後に來の字に因んで還相廻向の意味を述べて居らるゝのであるから、慶西房宛一片の御消息ではあるが是れで以つて眞宗の綱格を示して居らるることになる。彼の教行信證に「謹んで淨土眞宗を案ずるに二種の廻向あり、一つには往相二つには還相」云々と云ふ大文字に對して是れは其の縮圖であり平易化であると申したいのである。

第十章 讚仰の數々

さて個様に此の御消息集に就いて、遂條吟味して其の含蓄して居る思召しを解説して見るならば殆んど際限のないまでに展開せられて來るのである。然かし講義が其の目的でもなく、従つて宗學上の沙汰をすることは却つて領解に苦しむやうにもなる。それよりは寧ろ讚仰に力を注いで讀者と共に法悦に浸るのが望ましいやうにもおもう。さり乍ら私は今筆を呵し乍らも與へられたる紙數の制限に就いて考慮しつゝあるのである。實は御消息集に現はれたる思想ばかりでなく、形態外觀に對しても大に讚仰したいものが數多くある。先づ最初に第二通の六月一日性信の發信に對して聖人は七月九日に御返事を認めて居られ、或は第六通九月廿七日慈信房の發信に對して聖人は十一月九日に御返事を認めて居らるゝが、此の下總京都間の交通に三十九日を要し常陸京都間の交通に四十三日を要せし點に就いて種々考へらるゝ邊もあり、聖人は着信と殆んど同時に御返事を認められた事實がある。そこで是れを以て聖人の誠實溫情と云ふ事も知れる譯である。第二に又第三通に「護念房の便りに教忍御房より錢二百文御志の物賜はりて候、さきに念佛の勸のものの方々の御中よりとて確かに賜つて候ひき、人々に喜び申させ給ふべく候」とあり、また第六通に「さては御志の錢伍貫文十一月九日に賜はりて候」とあるに就いて聖人の經

濟生活特に懇志に對する感恩の御精神をも考へて見たいのである。而して此の第六通に依ると慈信房よりの懇志を十一月九日に受領し即日御返事を出して居らるる事になる。是れで見ても聖人の几帳面な御生活が窺はるゝのである。第三に又第五通に「文書きて參らせ候此の文を人々にも讀みて聞かせ給ふべし」とあり、第九通に「入西御房の方へも申したう候へども同じ事なればこの様を傳へ給ふべく候」とあるが、御消息は元來對個人關係のもので他に發表すべきものではない。然るに聖人は御消息を公開せられたのである。私は是れを文書傳道の性質を有するものとして聖人の卓見を讃仰したのである。第四に聖人は第一通に「詮ずる所は唯信鈔、後世物語、自力他力、此の御文共をよくよく常に見て其の御意に違へず在しますべし」とあり、第三通に「そのやうは唯信鈔に詳しく候よく御覽候ふべし」とあり、第六通に「力をつくして唯信鈔、後世物語、自力他力の文の意ども」云々とあり、又第八通に「唯信鈔、後世物語などを御覽あるべく候」と仰有つて關東信仰界の動亂に對して少しも自義と云ふものを骨張せられず、只管法然上人門下に於ける先輩同僚である聖覺・信空・隆寛の著作を推舉して是れを精讀々破せんことを懇々勧めて居らるゝ。而して又「なほ覺束なき事あらば今日まで生きて候へば態とも此方へ訪ね給ふべし又便にも仰せ給ふべし」と仰有つて懇切に尋ねるやう又來るやうにと勧めて居らるゝのである。第五にまた教團の動搖に對しても事を誤るのは未だ信仰に徹底せぬからである。佛恩を思はぬからであると云ふ事を隨時隨處に力説せられて、偏へに信仰に徹底するやう佛恩に感激するやうお勧めになつて居らるゝ、是れは移して以つて今日の教訓にもなるのである。苟くも何ものかに迷ふもの又念佛者として自信の足らぬものは、要するに其の信仰に徹底せぬ罪であり佛恩を思はぬ咎とせねばならぬ。以上旁々感想の一端を述べて御消息集講讀の結語に代へて措く。

(昭和十年七月一日偶々予が五十二回の誕生日を迎へたるの日)



聖典講讀全集第九回配本・昭和十年八月十日印刷
昭和十年八月廿一日發行・編輯者宇野圓空・發行
者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎・印
刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・印
發行所小山書店・版權所有宇野圓空及小山久二郎